財団法人東方研究会／東方学院

東方だより

第十六号

【本部（東京本校）】
〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
TEL 03-3251-4081
FAX 03-3251-4082
【東方学院関西地区教室】
〒533-0033
大阪府大阪市東淀川区東中島
5-27-44 崇禅寺
TEL 06-6322-9309
FAX 06-6321-7695
URL http://www.toho.or.jp

中村洛子名誉理事長ご逝去

財団法人東方研究会中村洛子終身名誉理事長は、六月四日午後九時五分、肺炎のため逝去されました。享年九十一歳でした。去る六月八日午後六時通夜、六月九日午前十時に告別式が、東京・杉並区の公益社明大前会館において、洛子名誉理事長を慕う多数の方々のご参列を得て行われました。また、天皇皇后両陛下・皇太子殿下・秋篠宮殿下からはご弔意を賜りました。

大正八年五月四日生まれ
帝国女子医学薬学専門学校医学科卒業
聖路加国際病院勤務
中村元先生（東方研究会創立者）と結婚のため退職
その後、学習院校医
平成元年より東方研究会理事
平成十一年より東方研究会理事長
平成十八年より東方研究会終身名誉理事長
ご遺族に、長女の三木純子氏（東方研究会理事）
次女の三好慈子氏（同評議員）がある。

弔辞

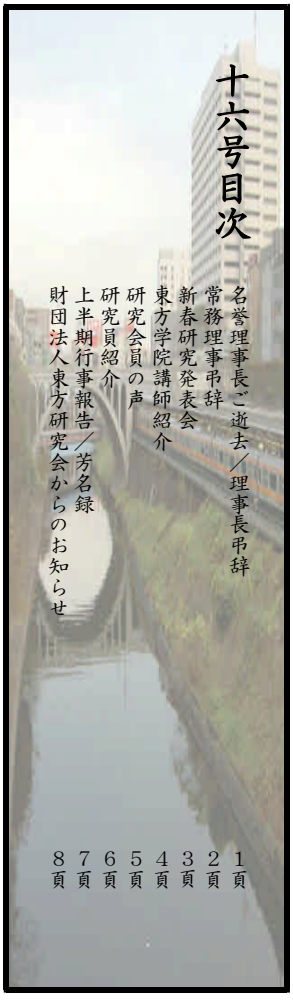
理事長・前田専學

中村洛子名誉理事長のご仏前に謹んで哀悼の意を捧げます。

思い起こせば、一九九九年十月十日に、当研究会は、創立者中村元理事長・学院長を失い、私どもは大きな打撃を受けました。しかし、理事会におきまして、中村洛子夫人のご決断で、中村先生のご遺志を継承していこうという総意が得られました。そこで中村夫人に理事長に就任していただき、東方学院は、三枝充悳監事に学院長をお願いし、私はご高齢の理事長の補佐役として常務理事を務めることになり、トロイカ方式で再出発をいたしました。

まず洛子理事長が陣頭にお立ちになって、前理事長当時、熱心に当研究会をご支持して下さっていた関東と関西の方々を訪問し、理事会の方針をお伝えし、従来と変わらぬご支援をお願いすることから始めました。幸い、それらの方々の変わらぬご支援のみならず、新たに会員・維持会員・寄付者などとなって頂いた多数の方々のご賛同・ご協力を得て、今日にいたるまで、曲がりなりにも財団法人東方研究会と東方学院の活動を続けることができました。これは、ひとえに洛子理事長のご熱意とご指導力によるものであります。

私どもは、今後とも、中村先生が掲げられ、洛子理事長が継承された、高邁な理想の実現に向かって最善の努力を傾注する所存でございます。どうか非力な私どもをお二人でお見守り下さいますようにお願いいたします。



十六号目次

名誉理事長ご逝去／理事長弔辞　1頁
常務理事弔辞　2頁
新春研究発表会　3頁
東方学院講師紹介　4頁
研究会員の声　5頁
研究員紹介　6頁
上半期行事報告／芳名録　7頁
財団法人東方研究会からのお知らせ　8頁

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　財団法人東方研究会

弔辞

常務理事・奈良康明

奥様、長い間ご苦労様でした。

大正八年のお生まれですので今年九十一歳におなりかと思います。

奥様がお医者様であったことは存じておりましたが、現在の東邦医科大学のご卒業だったのですね。正確には帝国女子医学薬学専門学校の医学科を出られて、医者としてのキャリアをはじめられました。母校の帝国医専付属病院や聖路加国際病院にお勤めの後、昭和十九年に中村元先生とご結婚されました。その後は主婦として先生の御研究を助ける傍ら、立教女学院や学習院幼稚園あるいは学習院大学の校医として若い生徒さん方の健康保全に努められました。

今回、奥様の訃報を聞いて、天皇・皇后両陛下から「弔意」が示されましたが、これも学習院でのお仕事に関わるものであります。両陛下から、御三人のお子様方がお世話になったことへの感謝の言葉とご冥福を祈る旨の懇ろなお言葉が示されました。また皇太子殿下・秋篠宮殿下からも同様の弔意が表されたと伺っています。奥様の校医として生徒さん方に接する優しい気の遣われ方が目に見えるようです。

中村元という偉大な学者の妻として先生のご研究を助け、大成させたご功績は真に大きなものでございます。学者、研究者はどなたもそういう傾向がありますし、中村先生もおそらくそうだったと思うのですが、研究に打ち込むと頭がそれで一杯になり、つい、日常の細かなことはおろそかになりかねません。奥様はそうしたことを踏まえながら、先生を支え、お子様をお育てになり、そして私たち弟子や学生をかわいがってくださいました。

奥様もご記憶のことと思いますが、元洛会という会がありましたね。中村元の元と洛子の洛とを併せた名前です。先生ご夫妻に仲人をしていただいたものは三十組を超えていると伺いましたが、五年に一度この元洛会が開かれ、子供さん方を連れて集まることになっておりました。その時に欠席者を含めてみんなが最近の家族の写真をお送りすることになっていました。奥様はアルバムを作って私たちの成長、発展を喜んで下さったのですが、そのお姿が眼にやきついています。

これとは別に奥様方女性のみの会合も折々に開かれて、洛元会と呼ばれていたはずです。

私たちのこの元洛会では先生と同時に奥様からもお話を伺うのですが、そのお話がまことにさばさばとして、明るく、ユーモアに富んだもので私の記憶に強く残っています。

ご記憶でしょうか。奥様はこういうことを仰られたことがありました。中村はね、とご主人の中村先生のことにふれられて、研究の方に気持ちがいっているから、なかなか身を入れて話しを聞いてくれない。あなた方若いご主人方も、同じなのだろうけれど、極力奥さん方の話しを聞いてあげてほしい。せめて十回に三回でいいから本気で話しを聞いてあげてください、ということでした。

実は家内が奥様のこの言葉をよく覚えておりまして、私が上の空で返事をすると、中村先生の奥様もこういわれたでしょ、と言ってくる。うんうん、と聞きながら、でも中村先生だって「心ここに在らず、研究にあり」と上の空で返事をされたこともあったから、奥様がそう言われたのだろう、などというと、先生とあなたは違います、などとたわいもない口争いになったこともありました。

仲人をしていただいた者だけではありません。若い学生たちも、正月などには中村家を訪れてはお汁粉をご馳走になりながら、話を伺わせていただく。先生ご夫妻のあたたかいお人柄と配慮にあまえつつ、どれだけ私たちは教えていただき人生を歩いてきたことか。先生から教室で教えて頂いたこともさることながら、先生と奥様お二人からどれだけ大きな影響を受けたことか。今いろいろと思い出し、感謝しています。

まことに幅広いお仕事をされながら、人生を存分に生き抜いてこられた奥様です。中村先生は晩年にしきりに「あたたかい心」ということを仰っておられましたが、あたたかい心は先生、そして奥様が身を以て示されたものです。それだけ多くの人々につくされ、それは同時に奥様の人生を豊かにし、幸福なものとされたに違いありません。

お好きだった花にかこまれ、先生と共に、あの世でも幸福に過ごされていることとと信じております。奥様は亡くなられて、何処へ行かれたのか。私には、奥様はどこかの山に行かれたとか、天に行かれたとか思いません。千の風になって時折私たちの思い出に現れるものとも思いません。私は、いや私たちはみんな、生者としての毎日の生活の中で奥様と先生の「行方」を探し求めてゆきます。探し求めることのできる人生を送るつもりです。

心からご冥福を祈ります。

平成二十二年六月九日

新春研究発表会

三月十五日（月）、東京都文京区の東京ガーデンパレスにおいて、毎年恒例の当会主催の新春研究発表会（研究発表／懇親会）が開催されました。会は二部構成で、先に行われた研究発表では、当会の前田專學理事長からのご挨拶に続いて、当会平成十八年度アジア諸国派遣留学生・独ミュンヘン大学Dr.Phil.の上野敬子氏による「中村元先生とインターカルチュラルフィロソフィ(間文化思想)」と題する研究発表と、武蔵野大学教授の田中ケネス氏による「飛躍するアメリカ仏教―仏教教育と研究の現状を中心にして―」と題する研究発表とが行われました。

その後、会場を同施設内の別室に移し、八〇名近い列席者の中、前田理事長から西村玲研究員に日本学術振興会章の表彰状授与、引き続き財団法人克念社理事長風間眞一氏代理佐藤和彦氏(庄内銀行東京支店長)とホテルマネージメントインターナショナル相談役比良龍虎氏に感謝状贈呈が行われ、浅井泰範理事による乾杯に始まり、和やかな雰囲気の中、懇親会が開催されました。

「東方学院と中村先生のお蔭」　田中ケネス（武蔵野大学教授）

このたび、私は当研究会におきまして三月十五日に発表の機会を頂くことができ、とてもありがたく思っております。準備をさせて頂く中で、学生時代に深い感銘を受けた中村先生のご著書との出会いも同時に鮮明に思い出す事にもなり、東方学院と中村先生が私の人生の中でどれだけ大きいものであったかも再確認する機会を頂きました。

四〇年前になりますが、私がスタンフォード大学の三年生の時の事で、The Ways of Thinking of Eastern Peoples（東洋人の思惟方法）という中村先生のご著書を大学の図書館で見つけるや否や、私はその本に没頭し、中村先生の広大な知識と新鮮な研究方法に感銘を受けたのです。

その後、一九七四年に大学院生として日本へ留学するにあたり、先ず東方学院で中村先生のご講義を受けさせて頂こうと決意しました。しかし、実はその年あいにく先生は、アメリカへ客員教授として渡米される年で、私は先生から直接ご講義を賜る事は叶いませんでした。しかし、私が四月からの授業に向けて、三月上旬に渡日してすぐ、東方学院を訪問した際には、まだ先生は渡米前で幸運にも先生にお目にかかる事ができました。

その時の光景をちょっと思い出してみますと、当時、中村先生との面識が一度もなかった私は、まず学院へ着き、私のつたない日本語で、親切な事務の方とお話をし、自己紹介し始めたのです。しかし、すぐにその親切な事務の方が中村先生だと気がつき、赤面困惑した事を覚えております。その時の中村先生は、深々と非常に丁寧にお辞儀をされ、アメリカ育ちの私がいくら頭を下げても、まだ先生の頭が私の下にあったのです！中村先生のような大先生が、私のような学生にも、あのように対応してくださったことを、一生忘れることができません。

東方学院では、奈良先生や石田先生のご講義を一年間受講させて頂き、お蔭さまで翌年、東京大学印度哲学科修士課程に入学することができました。東京大学では、前田專學先生とのご縁も頂き今日に至っております。一〇年ほど前に、アメリカにいました私を、先生のお力添えもあり、武蔵野大学へと教鞭の地を日本に移す機会を頂きました。

さて、私の発表では、「飛躍するアメリカ仏教―仏教教育と研究の現状を中心にして」という講題で、映像を交えながら、楽しく話させて頂きました。この非常に興味深い現象は、日本では一般にはあまり知られていない事から、丁度、『アメリカ仏教』という私の本がこの春に刊行されることもあり、これを中心としてお話をさせて頂いたのですが、後で考えますと、私の本の宣伝のようになってしまったようで、少し後悔している次第です。しかし、この本も（私が生まれて初めて書いた日本語の書物）、三十六年前、東方学院で始まった私の日本での学習の蓄積の結果だと考えて頂ければ、少々お許し願えるかなぁと、甘えるような気持ちでいる所です。

前述致しましたが、今回の講演の機会を頂き、中村先生を始めとし、東方学院とのご縁により、何とか私が今迄前進することができた事を再認識すると同時に、このご縁に深く感謝させて頂く機会となりました。

「中村元先生とインターカルチュラルフィロソフィー（間文化思想）」　上野敬子（独ミュンヘン大学 Dr.Phil）

インターカルチュラル フィロソフィー(IP)は、グローバル化の進む今日、文化間の相互理解のために哲学の分野でも新たなあり方が考えられる中、問題とされるようになった。一般には哲学的な態度、認識を示す概念であると理解されている。これは具体的には、どの文化圏に属する哲学的伝統も概念体系も絶対的な立場に据えないという方法をとって実践される。

中村元博士は比較思想に関する多くの研究を著しているが、それらはIPの発展のために学ぶべき多くのものを有している。その一つとして、一九五九年に著された『比較思想論』を見ると、そこにはまず、比較思想研究における様々な志向性を見つけることが出来る。例えば近代に入り文化交流が再び盛んになると、西洋では、政治的・経済的利益、軍事的支配統治、或いは宗教伝道などの目的達成のために異文化を理解しようという意図をもって、東洋思想の研究が始まった。これらの動機からなされた研究においては、その「研究態度は、どこまでもヨーロッパ思想に根拠をおき、東洋思想に対しては単に手段的意義しか認めないもの」であった。比較思想の歴史の大きな流れの中で、このような態度は、異文化の存在意義を承認し、平等な立場からその思想を研究し、またそこから学ぼうとする態度へと徐々に変化していったようである。

しかしこのような態度も、決して異文化思想理解のための十分条件とはならない。比較思想の多くの例は、我々が自分の理解の基準、つまり先入観によって解釈の一つの枠を設け、その中で他者を理解しているのを示しているのである。このような先入観から解放されるためには、視野の転換が必要になる。この視野の転換は今日の比較思想の一つの課題であり、それは、私たちが自らの思想の偏狭性を自覚するとき、はじめて可能となってくる。

中村博士の研究は詳細で膨大なものであるが、それらの研究によってその研究が本当に語っているものが常に見られるように思う。それは未来への道標となるものである。

東方学院　講師紹介

私のクラスの研究会員たち

田村 晃祐
（東洋大学名誉教授）

十数年にわたる東方学院での講義の研究会員たちの中には種々の人がおり驚かされることもありました。

ある中年の女性は他の研究会員とよく対立しました。そこで一度ゆっくり話を聞きたいと思い喫茶店へよんで話し合いました。するとその人は、新興宗教を作りたい、その為の勉強ですから一所懸命なのです、ということでした。それは意図して作るようなものではないと思うから、ただ仏教を理解したいということで勉強して欲しい、といいました。間もなくその人は去っていきました。

鴨長明が西方の開けた、落日の光景の見えるところに方丈を置いた、ということを知って、自分も書斎の西側に窓を作って落日を観ずるようにした、という人がおりました。残念乍らこの人は新興仏教開創希望の女史と対立し、去っていってしまいました。

現在の研究会員は長年受講し続けていてくれる人が多く、この人達は仏教についていろいろ論じ合い、議論することができるようになっているのが、私には有難い。

従来の解釈に盲従することなく、こういう解釈ではこういう疑問が出てくるのではないか、と私が疑問を述べると、その疑問の意のある所を了解して下さって研究会員同士の間で議論の花が咲き、他の人の見解を調べ、穏当な結論へもっていくことができるようになっています。日本人特有の権威盲従主義、流行属従主義を持たず、主体性をもって考えていく態度ができています。私にはこれが有難い。

また率直に疑問を投げかけてくる方もいらっしゃる。当面の解説の対象だけでなく、仏教全般に及び、時には西洋の思想や東洋の思想の他の思想迄引き合いに出しての議論になる。この時も研究会員同士の話し合いに発展する。活発な楽しい教室風景になっていることが嬉しい。

東方学院関西教室と私

西尾 秀生
（近畿大学教授）

一九八二年に当時の東方学院があった明宏ビルで中村元先生に面接をしていただきました。クリシュナ神話を研究するために、東方研究会からのインドへの短期留学を希望していたからです。翌年マドラスのアディヤール研究所に留学中に、山口恵照先生と中村先生との間で東方学院関西教室を始める話が決まり、私も講師を務めることになりました。一九八四年四月から梅田で東方学院関西教室が始まると、毎年夏に中村先生が大阪に来られて、関西教室で講演をして下さいました。中村先生を新大阪駅にお迎えに行き、講演会場やホテルまでお送りするのは、研究員でもあった私の役目でした。その折に親しくお話させていただきましたが、以前に私が話した内容をよく覚えておられるのにいつも感心し、また先生の温かいお人柄に心を打たれました。新聞に中村先生の講演の案内が載ったので、大勢の人たちが講演を聞きに来られました。それらの人たちの中から関西教室の受講生になられた人もおられたので、確実に受講者は増えていきました。

私は関西教室の最初のころは「インドの説話」というテーマで講義をしていましたが、その内「サンスクリット語」も担当するようになりました。受講生の方々はとても熱心で、しかもインドや仏教についての知識をもっておられたので、カルチャーセンターや大学よりもレベルの高いものになったので、講義の準備には充分な時間をかけるようにしました。また受講生の方々と講義の後にお話をする機会もあり、触発されることも多々ありました。この頃の東方学院での経験が大学の授業にも役立っているのは大変有難いことです。

現在も関西教室の講師を続けていますが、最近は大学の仕事が忙しく、語学部門の「サンスクリット語中級」しか担当していません。多くの熱心な受講生の方々にお会いしたいので、もう少し時間にゆとりができましたら、以前のような研究部門の講義も担当したいと思っております。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　財団法人東方研究会

研究会員の声

私と東方学院の出会い

富岡 万葉

初めて赴いたインドの地は南インドのケララ州でした。のんびりした雰囲気、美味しい食べ物、そしてたくさんの不思議な伝統芸能にすっかり夢中になってしまい、以来年に一度は旅行するようになりました。

現地で利用しているホテルは、地元の文化芸能を大切にしており、毎日敷地内で音楽家や舞踏家の演奏が行われていました。そのうちにそれが南インド特有の音楽や舞踊であること、北部の音楽とは楽曲の内容や演奏ルールまで異なっていること、とりわけヒンドゥイズムに深い関係があることなどを学びました。もともとインドの文化に興味があったので非常に興味を持つようになり、本を読んだり、現地の音楽家に質問したりしながら追及するようになったのです。

自分も演奏してみたい、という「野望」を抱くようになり、調べてみるとヴィーナ、という楽器があることがわかりました。インドの神様サラスヴァティーの持ちもので、北インドの楽器であるシタールと形は似ていながら、弦の本数が少なく見える・・・単純な性格ゆえ、「これだ」と思い込んで決めてしまいました。

しかし、ハタと気付くにインドに行くのは一年に一度、これでは話にはなりません。日本にも何かしら教室があるだろうとインターネットなどで探してみたのですが、出てくるのはシタールばかり。これは無理か、とガックリしていた矢先、気が向いてフラリと代々木公園のイベント「ナマステ・インディア」に行きました。いろんなブースをくまなく見ているとなにやら楽器がゴザの上にごろごろと置いてある場所があります。南インド音楽の匂いをそこに感じたので、もっと注目すると、なんとそこには日本でも数少ないヴィーナ奏者の的場先生がいらっしゃいました。そこは東方学院のブースだったのです。そんなわけで今年度から東方学院の「南インド古典音楽」講座を受講することになり、私のヴィーナ修行が始まったのでした。

授業は演奏技術だけでなく、南インド音楽全般の理論や考え方について広く教えていただく場になっています。現地録画のビデオや音源が豊富にあり、様々な資料に基づいた授業内容で、とても分かり易いです。ヴィーナは習得段階に応じて個人レッスンで習えるのが大きな魅力です。毎回発見の連続で楽しく受講しています。

仏教と私

井田 徹

この原稿を書くに際して、改めて古いメモをひっくり返したら、二〇〇〇年から東方学院にお世話になっている記録が出て来た。まさに十年一日の感がする。初心を振り返ると、「仏教は信仰ではない。思想であり、哲学なのだ」と思って学習を始めた場所が東方学院だった。

新しい学習を始める前のしばらくの期間、私はお寺が催す法話の会に出席し、坐禅の集まりに顔を出すようにしていた。しかしなんとなく飽き足りなかった。そんなとき偶然にも『ブッダのことば』（中村元訳、岩波文庫）に出会った。そして眼が覚めた―「これが仏教なのだ」と。その流れに乗って『真理のことば・感興のことば』（同上）と『ブッダ最後の旅』（同上）にも飛びついた。その後はＩＴの発達した現代、東方学院を探し当てるのにたいして時間はかからなかった。

という次第で私が仏教に強く惹かれるようになったのは、「自帰依・法帰依」に表されるその合理性にある。もちろんそのように仏教を捉えるのは私一人ではない。ごく最近刊行された『アメリカ仏教』（ケネス・タナカ著、武蔵野大学出版会）は、仏教は「メディテーションを中心とし、教えの適正を自分自身が確認し、体得し、それによって自分が変わっていくという方法である」と述べている。また著者は「これは、宗教パラダイムの変換を象徴している」としている。つまり仏教を含む宗教の見方がアメリカで変化したのである。さらに著者は、このような合理的思考によってアメリカ仏教は「個人化」(individualized)され、「批判的精神」を産むようになったと指摘している。

一方で仏教は二五〇〇年の長期にわたって、アジアの広大な地域に伝播する中に、むしろ自由思想と対立したこともあった。しかし先に述べたように、釈尊は死を目前にして「理法(dharma)のみに照らして自分自身で納得できるまで考えなさい」と言い残しているのだから、そもそもの誕生時に仏教はすぐれて合理的な精神に貫かれていたのである。したがって現代のアメリカで宗教に対するパラダイムが変化して、主体的な態度を求めるようになったときに、仏教が広く受け容れられる方向に向かうのはごく自然な成り行きであろう。

こうした考え方の契機や方向性を与えてくれるのは東方学院だから、そこに辿り着くまでの六十年余りの人生で仏教とは縁遠かった私にとって、東方学院はこの上なく貴重な存在である。

研究員紹介

夕焼けに立つ富士

林 慶仁

慈覚大師円仁が修行し「歴史はあるのに…」と酷評される、田舎の小さな寺に生まれた自分は、生活のため僧侶以外にも職業を持つように言われて育ちました。

高校時代は片道十二キロ自転車通学をしておりましたが、書棚には田舎の本屋で求めた中村元訳『ブッダのことば』がありました。高校生の心にある中村先生といえば、帰宅途中に遠く夕日の中に見える富士山のイメージでした。

家を離れた大学時代、仏教を専門としたのは必然だったかもしれませんが、「インド論理学の理解のために」という中村先生の論文で仏教論理学の研究を始めたのも、偶然でなかったかもしれません。

そんな折中村先生が、円仁研究書の前書を書いておられるのを知り、先生との距離が急に縮まった気がしました。中村先生が実家からそう遠くなく足利学校の庠主になられたと聞いた時も、グンと近くなった気がしました。

二つ目の職業を研究者と定め、大学院修了と同時に、御指導を受けていた高崎直道先生の御紹介で、夢のような東方研究会研究員の面接を受けることになりました。

緊張のまま向かった会場中心には、テレビで見たのと同じ先生が座っておられました。何を聞かれ何を答えたか詳しくは覚えておりませんが、「がんばってください。まだ若いのだから・・」とお話になった高音のお声の向こう側には、富士だけではなく、すべての雨水を受け入れる湖とを見ました。

幸いにも研究員にしていただき、謦咳に接し、学びをいただきましたが、新世紀を前に先生はお亡くなりになりました。その翌年に父も、寺務の引き継ぎすることないまま病気で他界いたしました。

時がたち一息ついた頃、東方学院の方々が団体バスで拙寺に立ち寄られることになりました。その折、同行された奥様の洛子先生から驚愕するような言葉をお聞きし、皆の帰られた後ひとり涙を流したのです。

「そうです、このお寺です。生前主人と一緒に来ました。間違いありません。」

私と中村元先生と仏教

吉村 均

私が研究員に採用していただいた時は、中村元先生がまだご存命で、理事長室で面接を受けました。私は倫理学科の出身で、はじめてお目にかかる世界的大学者の前でとても緊張し、印度哲学科の人間ではないことを恐る恐る申し上げたところ、やさしい笑顔で、「うちは学閥は一切ありません。勉強する意欲のある人は歓迎です」とおっしゃっていただき、先生も学生時代に倫理の和辻哲郎先生の講義に出られたことを話してくださいました。

その後、私は色々な事情で（昨年出版した『神と仏の倫理思想　日本仏教を読み直す』のあとがきに書きました）、チベットの先生方から伝統的なやり方で仏教を学ぶことになり、日本で主流である文献学とはさらに反対の方向に進むことになってしまいました。

そうやって十年以上が経って気づいたのは、中村先生が仏陀の教えの本質を実に鋭く捉えられているということでした。先生のお仕事として、「スッタ・ニパータ」の翻訳（『ブッダのことば』）やナーガールジュナの空の思想のご研究は有名ですが、チベットの伝統でも、先生が注目された「自身の主張はない」ことこそが仏陀の境地で、そこに核心をみて膨大な教えを体系づけた存在として、ナーガールジュナが尊ばれています。しかしそれは常人には概念的に理解することすら困難な境地で、そこに到達するための手がかりとされているのが、シャーンティデーヴァ『入菩提行論』（漢訳「菩提行経」）です。これについても中村先生は『こころを読む 大乗仏典V』で、『中論』『唯識三十頌』と共に取り上げられています。中観・唯識の中心テキストと並んで扱われることは、チベットならともかく、当時の日本では破格のことと映ったのではないでしょうか。

これらには、膨大な註釈や実践がチベットの伝統にあります。それをお伝えできなかったことを残念に思うとともに、先生の偉大さを改めてかみしめている昨今です。

研究活動報告 ― 研究部会紹介 ―

当財団では、平成十九年度より、更なる研究活動の進展と研究員相互の交流を目的として新たに研究部会を設置致しました。全ての研究員がいずれかの部会に所属し、それぞれの分野で研究に努めています。今後、各研究部会の活動報告ならびに紹介を随時行っていきます。今号では「比較思想研究部会」の概要および活動状況の紹介をいたします。

〈比較思想研究部会〉

本研究会は、現在中央大学教授であり、元東方研究会主事であった保坂俊司先生が中心となり立ち上げた部会であり、保坂先生には幹事をつとめていただいている。

この研究部会は、東方研究会が研究員のための研究部会を立ち上げる以前から活動を始めていた。というのも、現在、常務理事である奈良康明先生の「月に一度、研究員が集まる会を作った方が良いのではないか。毎回発表というのでは大変であるから、何かテーマを見つけて勉強する方が良いであろう。もし、誰かが学会発表の前であるのならば、そのリハーサルを行い、意見交換が出来ればと思う。とにかく、お互いに顔を合わせ、専門が違う人が集まって意見を交換する場が必要であろう」との助言により、保坂先生、奈良修一・森和也の両研究員が中心になって始めた研究会が元となっている。

この研究部会では、中村元先生の決定版選集、別巻1の『古代思想』から読み始め、現在は、別巻2『普遍思想』を読んでいる所である。参加する研究員は、月により増減はあるが、森研究員、奈良研究員、佐々木研究員、加藤研究員が中心となり、その他に時間があれば他の研究員や外部の研究者も参加し、議論を戦わしている。また、研究会毎に、その議論を要約したものを奈良研究員よりメールで全研究員に送っている。

この活動が微力ながら中村先生のご研究を受け継ぎ、さらに深めていく一助になればと思っている次第である。

（奈良修一）

平成二十二年上半期（一月～六月）行事報告

第二回 中村元インド哲学カフェ

一月一〇日（日）午後二時より、東方学院関西教室主催の公開講座が京都市下京区にあるキャンパスプラザ京都の二階ホールにおいて第二回中村元インド哲学カフェ「インド舞踊マンダラ」が開催されました。中村先生の人物と業績、さらには東方学院について関西の方々に広く知っていただくために企画されたものです。当日は約五〇名の参加者がチャイ（インドのお茶）を片手にインドの文化に触れました。第一部カフェタイムではMrs.Shobha Rani Dash氏による「インドのオリッサ古典舞踊のおはなし」、第二部フリートーク&レクチャーでは佐久間留理子研究員による「仏像に見るポーズの不思議」（座談会形式）が催されました。第一回に続き、今回も参加者からは活発な質問が飛び交い大変な盛況ぶりとなりました。

東方学院ガイダンス

四月七日（水）午後六時より、東方学院のガイダンスが東京都千代田区にある神田神社明神会館（東京本校）及び大阪府大阪市にある大阪新阪急ホテル（関西教室）において開催されました。

東京本校のガイダンスにおいては、最初に前田專學東方学院長により創立者中村元博士のビデオを鑑賞しながら、東方学院の理念や学院全般についての説明がありました。続いて各講師の紹介、講師による講義内容の説明などが行われました。参加者は前田学院長をはじめとする約三十名の講師と、研究会員諸氏、合わせて約百名でした。

第六回 清水寺仏教文化講座

五月二十二日（土）午後一時より、島根県安来市の清水寺において、第六回清水寺仏教文化講座が開催されました。本年は、前田專學学院長による「中村元先生の所依の経典について」と題するご講演と、佐久間留理子研究員による「仏像成立の歴史ーインドを中心としてー」と題する講演が行われました。例年どおりの盛況ぶりで、本堂に集まった満杯の聴講者を沸かせました。

研究員総会

六月二十五日（金）東京都千代田区にある学士会館において第四回研究員総会が開催されました。この総会は当会の更なる発展のため、研究員が一同に会し交流を深めつつ互いに意見交換を行うことを目的として企画されたものです。当日は約三十五名の研究員が出席し、前田理事長の挨拶に始まり、執行部より研究員に対する通達・要請事項が伝えられました。また、その後、研究会の運営などについて研究員間で活発な議論が交わされました。

平成二十一年度　芳名録（五十音順・敬称略）

維持会員

赤井士郎　足利学校事務所　飯岡祐保　今西順吉　瓜生津隆真
小笠原勝治　風間敏夫　門脇英晴　金田泉　川崎信定　久間泰賢
清島秀樹　黒川文子　小坂機融　小島岱山
(宗)金剛院仏教文化研究所　在家仏教こころの研究所　斉藤敬
坂部明　清水谷善圭　釈悟震　(株)春秋社　淳心会(日野紹運)
末廣照純　菅原信海　鈴木一馨　高松孝行　多田孝文　多田孝正
田村晃祐　千葉よし子　中央学術研究所　千綿道人　津田眞一
角田泰隆　(財)東洋哲学研究所　常盤井鸞猷　奈良康明　西岡祖秀
西川高史　羽矢辰夫　比良佳代子　(財)仏教伝道協会　保坂俊司
前田專學　前田式子　松本照敬　丸井浩　三木純子　水野善文
三友量順　武蔵野大学　吉野恵子　渡邊信之　渡邊寶陽

賛助会員

秋葉佳伸　阿部敦子　有馬頼底　石井義長　稲葉珠慶　石上智康
遠藤康　大谷光真　荻山貴美子　奥住毅　金田静江　亀山祥之
北正修　北村彰宏　木村清孝　窪田成子　小泉宗之　小林節子
小峰立丸　小山典勇　近藤良一　佐久間留理子　桜井瑞彦
桜井俊彦　定方晟　島田外志夫　末木文美士　菅野博史　須佐知行
鈴木勇介　大海修一　高野英二　高橋審也　田上太秀　武田浩学
田中良昭　田丸淑子　田丸守也　田村久雄　鶴谷志磨子
(株)展勝地(軽石昇)　戸田祐久　鳥山玲　長野市南長野仏教会
中村行明　中村保志孝　中山静麿　成田山新勝寺　西尾秀生
西宮寛　西村心華　田原豊道(日本ヨーガ学会)　拝師暢彦
長谷川恵子　花岡秀哉　濱川量子　濱川香雅里　東本願寺
引田弘道　日隈威徳　久富幸子　福留順子　深井秋子　福士慈稔
藤井教公　藤川浩一郎　藤田宏達　藤山覚一郎　堀越教之
松野純孝　薬師院(松原光法)　松村淳子　的場裕子
往生寺(水野善朝)　宮元啓一　森祖道　森田幸子
長林寺(矢島道彦)　由木義文

東方学院後援会

今宮戎神社　大神神社　奥田聖應　(学)清風学園　加藤公俊
古泉圓順　坂本峰徳　四天王寺　四天王寺大学　高口恭典
瀧藤尊教　瀧藤尊淳　健代和央　塚原昭應　塚原亮應　出口順得
出口隆順　唐招提寺　東大寺　念法真教教団　長谷川霊信
平岡英信　廣瀬善重　南谷恵敬　宮崎光映　三宅光雄　森田禅朗
森田俊朗　山口恵照　吉田明良　山岡武明

御寄付

片山一良　門脇英晴　克念社　斎藤敬　親鸞仏教センター
(財)仏教伝道協会　田辺和子　中田直道　西村玲　長谷川霊信
比良佳代子　松久保秀胤　三友量順　山口恵照

皆様からのご支援に心から御礼申し上げます

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　財団法人東方研究会

財団法人東方研究会からのお知らせ

会員募集のお知らせ

当研究会では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会員と、当研究会への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

◇ **普通会員** ◇　年会費 ７千円

普通会員の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当研究会主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

◇ **賛助会員・維持会員** ◇　賛助会費 １口 １万円 ・維持会員 １口 ５万円

当研究会では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当研究会の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。なお、当研究会は、文部科学大臣から「特定公益増進法人」として認可を受けておりますので、ご寄付金額が5千円を超える場合には、その超えた金額が所得控除の対象となります。

＊ 詳細は財団法人東方研究会事務局までお問い合わせください。

『東方』第２５号 刊行

３月３１日、当研究会の機関誌『東方』の最新号が刊行されました。今号には論考４篇・資料２篇・報告１篇のほか、第１回神儒仏三教合同シンポジウム講義録及び中村元博士東方学院講義録（『大唐西域記』を読む）等を掲載いたしております。

なお、本誌は会員（研究会員を除く）の皆様にお送りしているほか、各種研究機関・図書館等にも納められています。頒布可能なバックナンバーもございますので、詳細は事務局までお問い合わせください。

【主な執筆者】（敬称略）

- 前田 專學　（東方学院長）
- 奈良 康明　（東方研究会常務理事）
- 徳川 恒孝　（徳川記念財団理事長）
- 石井 研士　（国学院大学教授）
- 竹村 牧男　（東洋大学教授）
- 定方　晟　（東海大学名誉教授）
- 山下 博司　（東北大学教授）
- 岡光 信子　（東北大学専門研究員）
- 水越 正彦　（東方学院研究会員）
- 木村　紫　（東方学院研究会員）
- 森田 俊和　（普通会員）

新任研究員紹介

本年四月一日付で左記の三名が新たに当法人の研究員として採用されましたのでここにご報告申し上げます。

【研究員】

加藤　みち子（かとう　みちこ）
学習院大学大学院
単位取得満期退学
博士（哲学）
研究テーマ
日本思想（中近世・仏教および神道）

山口　周子（やまぐち　なりこ）
京都大学大学院
単位取得満期退学
博士（文学）
研究テーマ
モンゴル仏教（仏教説話）

【研究員（非常勤）】

上野　敬子（うえの　けいこ）
ミュンヘン大学
博士課程修了
Dr.Phil.
研究テーマ
インターカルチュラルフィロソフィーと中村元先生の比較思想研究

東方学院では、各種講座の内容・受講料・お申し込み方法などを記載した『二〇一〇東方学院の手引き』を配布いたしております（無料）。ご希望の場合は、事務局にお申し込みください。

第十一回 酬佛恩講合同講演会のご案内

来る十一月二十七日（土）午後一時より、奈良市西ノ京の法相宗大本山薬師寺まほろば会館において、同寺のご後援の下、東方学院と酬佛恩講共催で第十一回目となる合同講演会を開催いたします。本年は、当会アジア諸国派遣留学生の細野邦子研究員による「インドの論理と西洋の論理」と題する講演と、東方学院講師の勝本華蓮氏による「縁と縁起の法」と題する講演が行われます。本講座の受講を希望される方は、葉書またはファックスにて当研究会事務局までお申し込みください（お名前とご連絡先を必ず記載してください）。

編集後記

このたび母を見送りました。母は少女のままおばあさんになってしまったような天真爛漫な人でした。夫婦の支え方はいろいろありますが、私の父母は笑い声で共に支えあっていたように思います。東方が続いていくことを西方より二人で微笑みながら眺めていることでしょう。（三木純子）

この夏ある研修を受けてきました。自分を縛ってきた呪縛とも言える紐をやっと解くことができ、人生で初めて「目から鱗が落ちる」体験をしました。今後は解いた紐を自分の礎とすべく、自らのペースで腰紐のようにしっかりと結びなおしていきたいと思います。（西岡秀爾）

東方だより 第十六号（平成二十二年八月一日）
編集／発行　財団法人東方研究会
【事務局】〒一〇一－〇〇二一
千代田区外神田二－十七－二 延寿お茶の水ビル四階
ＴＥＬ　〇三－三二五一－四〇八一